



TITLE:

唐帝國とソグド人の交易活動

AUTHOR(S):

荒川, 正晴

CITATION:

荒川, 正晴. 唐帝國とソグド人の交易活動. 東洋史研究 1997, 56(3): 603-636

ISSUE DATE:

1997-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155150>

RIGHT:

唐帝國とソグド人の交易活動

荒 川 正 晴

はじめに

- 一 朝貢・互市交易とソグド商人
- 二 外來ソグド商人の入境實態
- 三 外來ソグド商人の交易活動圈
- 四 羈縻州府「百姓」としての外來ソグド商人
結びに代えて

はじめに

唐において、衛禁律「越度緣邊關塞」條の疏議に明記されるように、公使以外の國境の出入が嚴禁されていたことは既に指摘されているとおりである。⁽¹⁾このため、朝貢使の正偽を明らかにするために、唐では銅魚符（銅契）と呼ばれる割符を用いることになっていた。榎本淳一氏の考察によれば、この銅魚符は、唐代前半期において、陸上の國境を通じて入朝する西域諸國にのみ與えられ、海路により入朝する日本などの國々には與えられなかったとされる。氏も指摘されるように、このことは、八世紀前半までの唐の出入國管理というものが、西北邊における陸上國境に重點が置かれていたことを示すものとなる。

ところで、こうした外交方針が採られていたことから、唐の周邊諸國は、朝貢の機會をとらえて唐と交易する、いわゆ

る朝貢貿易を行っていた。さらに唐と周邊諸國との間では、國家間の交易である朝貢貿易に對して、民間レベルでの交易を特別に認可する互市交易が行われていたことも知られている。言うまでもなくこれら朝貢貿易・互市交易は、唐だけでなく中國歴代の王朝が、保持してきた對外交交易のあり方であり、中國の獨特な外國との貿易形態として、しばしばその性格やそれが歴史的に果たしてきた意義について論じられている。⁽³⁾

しかし、唐前半期における唐と周邊諸國との交易のうち、西方世界とのそれは、こうした朝貢貿易や互市交易という枠の中では捉えきれないものが認められる。即ち、「商胡」あるいは「興胡」と呼ばれるソグド商人らは、朝貢貿易や互市交易だけでなく、それらとは全く無關係に、日常的に唐内地奥深くまで進出してくる存在となっていた。もちろん、彼らの進出は唐以前からのものであり、既に自治的な聚落さえも中國内地に作り上げていたが、ここに検討する唐前半期における彼らの活動は、そうした唐以前におけるそれとは次元を異にし、唐の帝國的秩序に組み込まれた構造的なものが認められる。

西北に偏在する長安に國都を据えた唐王朝にとって、唐の建國以前より中國領内に深く浸透し、さらには中國の周邊世界に廣く活動するソグド商人を如何に扱うかは大きな問題となっていたことは疑いない。また唐王朝はそうした彼らの母國を、西方奥深くまで手を伸ばす形でその支配秩序に組み込んでいくが、こうした行動の背景にはこの問題と關わる部分があったものと考えられる。

唐前半期における唐と周邊諸國との貿易にかかわるこれまでの検討は、ソグド商人の活動の重要性を示しつつも、西方との交易をその他の周邊諸國とのそれと同一のステージ、換言すれば朝貢貿易や互市交易という枠内にこれを留めて一括して論じようとする傾向が認められる。本稿は、唐と西方世界との交易の實態を、ソグド商人の活動を中心に据えて改めて考察し、そこから七世紀に成立した唐の帝國的支配の性格の一端を明らかにしようとするものである。

一 朝貢・互市交易とソグド商人

唐の帝國的秩序が、基本的に内地都督府・州／羈縻都督府・州／遠夷（入蕃）の三重構造よりなっていたことはほぼ異論のないところであろう。⁽⁵⁾ 朝貢貿易を行う朝貢國とは、通常はこのうちの遠夷にある國、即ち蕃國のそれを指し、『大唐六典』卷四禮部、主客郎中の條には全部で七十國を掲げている。ただし、この中には同時に羈縻都督府・州（以下、羈縻州府と略稱する）が設置されているものもあり、朝貢する蕃國としての側面と同時に、唐の羈縻州府としての側面を併せ有している國がある。唐の周邊諸國の少なからざる部分はこうした國であり、ソグディアナのオアシス諸國も、唐前半期を通じて羈縻州府が置かれていた。既によく知られている事實ながら、西域全體が唐の帝國的秩序に組み入れられていた、七～八世紀半ばのソグディアナ諸國を見る際に、こうした唐の羈縻州府としての側面をなかば切り捨てて捉えてきたように思う。少なくとも唐からすれば、ソグディアナ諸國は唐に朝貢してくる外國であると同時に、唐の羈縻州府として存在していたことを改めて確認しておく必要があるだろう。

また先に述べたように、こうした國家間の朝貢貿易に對して、外國との民間レベルでの交易として、互市交易も行われていた。互市交易といっても、石見清裕氏が検討されているように、⁽⁶⁾ 北方だけでなく南方での港市での交易もこれに含めることができ、唐の時代にも活潑に行われていたことが知られている。これに對して、西域方面における互市交易については、遊牧民族とのそれしか史料的には確認できない。⁽⁷⁾ 西域のオアシス諸國に對しては、「開元戸部格殘卷」（S. 1344、

〈寫〉TTD(B), p. 72. 〈錄〉TTD(A), p. 93.) に、

敕すらく、諸蕃の商胡、若し馳逐するものあらば、内地に於いて興易するを任すも、蕃に入るを得ず。仍りて邊州の關津・鎮戍をして、嚴しく捉搦を加えしめよ。其の貫、西・庭・伊等の州府に屬す者は、驗べて公文あらば、本貫より已東の來往を聽す。

垂拱元年（六八五）八月二十八日。

とあるように、唐は垂拱元年（六八五）に、利を求めて東來してくる商胡⁽⁸⁾、即ちソグド商人を対象にして、互市交易を越えて、内地での交易を正式に認可している。この方針は、この詔敕が開元年間の戸部格となっていることから、八世紀前半にも維持されていたことが明らかである。ただし彼らも、入境後は唐内地の「百姓」同様に蕃に入ることが許されない建て前であった。

もちろんこの方針は、唐初からのものではなかったらしく、『資治通鑑』卷一九三貞觀四年（六三〇）二月甲寅（二四日）の條に、高昌國王に従って西域諸國が遣使入貢しようとした際、太宗が使いを遣わしてこれを迎えようとしたのに対して、魏徵が、

今、天下、初めて定まれり。前者に文泰、來るに、勞費は已に甚し。今、借に十國をして入貢せしむれば、其の徒旅は千人を減ぜず。邊民は荒耗し、將に其の弊に勝えざらんとす。若し其れ商賈の往來を聽し、邊民と交市せしむれば、則ち可なり。儼し賓客を以て之を遇さば、中國の利に非るなり。

と諫めたことより見れば、貞觀四年時點では、他の多くの外國と同様に、西域諸國との民間交易も、最大限、「邊民」との互市交易を論ずる程度であったことがわかる。ただし次節に検討するように、この貞觀四年を境にして、唐は西域へその支配を擴大させてゆくことになる。

はじめに述べたように、唐は西域方面からの朝貢使には「銅魚符」を用いて入國審査をしたと言われるなど、私貿易商人による偽朝貢使の取り締まりに積極的であった。しかしながら一方では、既に見たように、歸蕃できない條件のもとで、私的な交易を目的とするソグド商人の入境自體も認めており、唐は決して彼らの私貿易そのものを排除はしなかったのである。このことから、ソグド商人の公認の入境方法として、朝貢使に伴う場合と私的に入境する場合とが存在していたことが認められる。

朝貢使に伴う場合は、入境にあたって、厳しい入國審査が行われていたと考えられるが、⁽⁹⁾唐内地において私的な交易に従事することが認められたソグド商人（以下、こうしたソグド商人を外來ソグド商人と稱する）の場合は、蕃域より唐領内に入境する際に、どのような手續を経て内地に入ってきたのであろうか。この點に關しては節を改めて検討しておきたい。

二 外來ソグド商人の入境實態

唐西邊における外來ソグド商人の入境の實態については、トゥルファン文書にその具體的な状況をうかがうことができ、
るものが残されているので、それを手がかりに検討しておきたい。まずは以下に錄文と和譯を掲げておく。

「唐垂拱元（六八五）年康義羅施等請過所案卷」（64T AM29: 17(a), 95(a), 108(a), 107, 24, 25〈寫〉『文書〔參〕』三四六～三五〇頁。
〈錄〉『文書』七、八八～九四頁。）

①

（前 缺）

- 1 垂拱元年四月 日
- 2 譯、翟那你潘
- 3 「連。亨白。
- 4 十九日。」

「亨」

②

- 5 ☐ ☐ (康尾) 義羅施年卅 —
 6 ☐ ☐ 鉢年六十 —
 7 ☐ ☐ (吐火羅) 拂延年卅 —
 8 ☐ ☐ (吐火羅磨) 色多年卅五 —
 9 ☐ ☐ (羅施等辯) 被問所請過所、有何來文、
 10 仰答者、謹審、但羅施等並從西
 11 來、欲向東興易、爲在西無人遮得、更
 12 不請公文、請乞責保、被問依實、謹
 13 ☐ ☐ (辯) 「亨」。
 14 ☐ ☐ (垂拱元年四) 月 日。

(後 缺)

(九行目以下の和譯)

(康尾義羅施等がお答え申し上げます。)[過所を請求するにあたり、どのような來文があるのか、仰ぎ答えよ]との尋問をお受けいたしましたので、謹んで審らかにいたします。但そ、私ども、康尾義羅施等は、みな西より來て、東に赴いて交易することを願っております。西(トゥルファン以西)に在っては誰も通行を規制するものではなく、従ってあらためて公文(來文||過所)を請求することはありませんでした。願わくは、保人を取り調べられますように。尋問をお受けいたしましたので、眞實に依って、謹んでお答え申し上げる次第です。「亨」。

③

(前 缺)

1 四月 日游撃將軍「」。

2 「連。亭白。

3 十九日「

4 …… 興生胡紇様年五十五…「」…「」

5 「」薦藩年卅五 — —

6 「」達年卅六 — —

7 「」延年六十 — —

8 (薦藩等辯) 被問所請過所、有何公文

9 (仰答者、誰) 審、但薦藩等並從西

10 (來) 漢官府、所以更不請

11 (公文。薦藩) 等並請責保、被

12 (問。依實、謹辯。「亭」)

(後 缺)

(八行目以下の和譯)

(薦藩等がお答え申し上げます。)(「過所を請求するにあたり、どのような公文があるのか仰ぎ答えよ」との尋問をお受けいたしましたので、謹んで審らかにいたします。但そ、私ども、薦藩等はみな西より(來ましたが、)唐の官衙(も無く?)、従つてあらためて(公文||過所を)請求することはいたしませんでした。薦藩等はみな、保人を取り調べら

れるよう願っております。(尋問をお受けいたしましたので、眞實に依って、謹んでお答え申し上げます。「亨」。)

④

(前 缺)

1

〔你那潘等辯、被問得上件人等辭、請略〕

2

家口入京、其人等不是壓良誑誘寒盜⁽¹⁰⁾

3

等色以不、仰答者。謹審、但那你等保

4

知不是壓良等色、若後不依今

5

款、求受依法罪、被問依實^(辭)。

6

〔亨〕 垂拱元年四月 日

7

「連。」 亨 白

8

十九日

(和譯)

你那潘等がお答え申し上げます。「上件人等の辭では、家口を引き連れて入京することを願っているが、

そのもの等は良人の子女を買って奴婢としたり、欺き騙してかどわかしたり、盗んだりしたものではないのかどうか、仰ぎ答えよ。」との尋問をお受けいたしましたので、謹んで審らかにいたします。但そ、私ども、那你等は、(これらが)良人の子女を買って奴婢としたものではないことを保証いたします。もし後にこの款に依らないことがあれば、すすんで法に依って罪をお受けいたします。尋問されましたので、眞實に依って謹んで申し上げます。「亨」。

⑤

(前 缺)

1 保人庭伊百姓康阿了^(年)□□□

2 保人伊州百姓史保年冊

3 保人庭州百姓韓小兒年冊

4 保人烏耆人曹不那遮年□□

5 保人高昌縣史康師年冊五

6 康尾義羅施年冊 作人曹伏磨

7 婢可婢支 驢三頭 馬一匹□□
□

8 吐火羅拂延年冊 奴突蜜□

9 奴割邏吉 驢三頭□
□10 吐火羅磨色多^(年)□□□□
□

11 奴莫賀咄 □ □

12 婢頡 婢 □ □

13 駝二頭 驢五頭。 □
□

14 何胡數刺 作人曹延那 □ □

15 驢三頭。
□

16 康紇槎 男射鼻 男浮你了

17 作人曹野那 作人安莫延 康□□
□18 婢桃葉 驢一十二頭。
□

- 19 阿了辯、被問得上件人等膝稱、請^(將)□□
- 20 家口入京、其人等不是壓良^(謀誘?)□□
- 21 冒名假代等色以不者、謹審、但了^(等保知)□□□□
- 22 不是壓良假代等色、若後不^(依今款)□□□□
- 23 求受依法罪、被問依實謹^(辯)□□
- 24 垂拱元年四月^(日)□□
- 25 「連。^(自)□□」

(後 缺)

(和譯、一九行目以下)

(康) 阿了がお答えいたします。「上件人等の牒では、家口を引き連れて入京することを願っているが、そのもの等は良人の子女を買って奴婢としたり、(欺き騙してかどわかしたり)、他人の名を騙りそれに成り代わったなどのものではないかどうか、仰ぎ答えよ。」との尋問をお受けいたしましたので、謹んで審らかにします。但^まそ、私ども、阿了等は、(これらが)良人の子女を買って奴婢としたり、他人の名を騙りそれに成り代わったなどのものではないことを保証いたします。もし後にこの調書に依らないことがあれば、すすんで法に依って罪をお受けいたします。尋問されましたので、眞實に依って謹んで申し上げます。

本文書は、六斷片より成っており、本來貼り繼がれていた順序については必ずしも明確ではないが、ここでは一應『文書』に掲載された配列に従うことにする。⁽¹²⁾

まず本文書が、何れも「辯」辭であることは、その書式より容易に認められる。詳しくは別稿に譲るが、この「辯」辭⁽¹³⁾

は別に「款」(くちがき、尋問調書)とも記され、お上の尋問に對しての供述書を意味する。實際には、尋問に對する答えを官司側が書き留め代書しているのであり、それを本人の前で読み上げて間違ひなければ畫指することになる。⁽¹⁴⁾①の部分には、その2行目に譯語人⁽¹⁵⁾の翟那你潘の名と彼の畫指が見えているが、翟姓ながら、那你潘がソグド語の「nyprn」であることから、彼がソグド人であることは間違ひない。おそらく彼は、取調を受ける者と官司との間に立ったソグド人であったと見られる。即ち、取調を受ける外來ソグド商人は漢語ができない可能性が高いことから、漢語での尋問とソグド語での辯明をそれぞれこの通譯が譯し、最終的な内容の読み上げ確認においても彼が漢語をソグド語に譯したものだと思われる。①の年月日の後の彼の畫指は、漢人の書記が作成した調書の内容に相違ない旨を證するものであろう。残念ながら、②・③の「辯」辭は、末尾が脱落していて確認はできないが、譯語人を介したのであれば、その名と畫指が添えられていたと推定できる。

以上の「辯」辭が、②・③より明らかのように、外來ソグド商人が西州都督府に過所を請求したことに對する、西州府側の申請者に對する尋問の供述調書であることは疑いない。

既に別稿において検討したように、⁽¹⁷⁾唐の州縣「百姓」が本貫を離れるための過所を取得する場合は、州縣の録事が窓口となり、そこを通して申請書を提出し、過所を受け取っていた。本文書における外來ソグド商人も、④の1行目によれば、過所を申請する辭を西州府の官司に提出していたことが知られるので、彼らも通常の「百姓」が過所を申請するのと全く同様な手續きを踏んでいたことがうかがえる。

また審問に當たっては、保人をはじめとする關係者の調書が取られることになるが、本文書でも、①～③に過所申請者の「辯」辭、續く④は通譯である翟那你潘の「辯」辭、さらにその後の⑤は保人の「辯」辭が貼り連ねられている。

さらに、通常の州縣「百姓」の申請であれば、こうした審問は、州府の過所發給を擔當する戸曹司の命を受け、縣において行われていたと見られるが、トゥルファン文書によれば、西州「百姓」でも商人の場合は、州の戸曹司より直接取り

調べを受けていたことが知られる。⁽¹⁸⁾ おそらくは彼ら外來ソグド商人の取り調べも、縣ではなく西州府の戸曹司で行われていたのであり、本文書に見える「亭」のサインも、戸曹參軍のものであった可能性は高い。⁽¹⁹⁾ 従って、外來ソグド商人に對する過所も、戸曹司の審査を通して、最終的には西州都督府の都督の決濟を経て、窓口となっていた州府の録事より支給されたものと見られる。

また戸曹司における審査では、本文書の②・③の「辯」辭より、彼ら外來ソグド商人がどのような公文を保持しているのか問題となっていたことが知られる。ここに言う公文とは來文（通行許可書）のことであり、ここでは過所を指している。⁽²⁰⁾ このことは、垂拱元（六八五）年當時、外來ソグド人が、トゥルファン來着以前に辿り着く唐の官府より過所を支給され、それを携帯して西州にきていることが前提となっていたことをうかがわせる。おそらくは西域を統轄する安西・北庭兩都護府（八世紀以前は庭州）が最初の過所發給地となっていたと考えられ、⁽²¹⁾ 本文書の外來ソグド商人も本來であれば、何れかの「漢官府」より過所を受け取っていたものと思われる。

兩都護府での過所發給の審査がどのようなものであったかはわからないが、西州府官司においてそれまでの過所が無いことが明らかとなっても、それに續いたと思われる保人らの取り調べでは、外來ソグド商人の率いる人（畜）の素性のみが問題となっていた。即ち、④以下の「辯」辭で明らかのように、彼らが率いる人（畜）が「其人等不是壓良誑誘寒盜」ではないことを保人や通譯が明らかにすることが求められたのである。このことから、兩都護府での審査も基本的にはこの點に重きが置かれ、その上で過所が發給されたものと思われる。

これらの「辯」辭よりうかがえるのは、外來ソグド商人らの入境が、蕃國人の入國としての側面も有しているにもかかわらず、その實態は、邊境州府の過所を取得するだけで京師へ入り込み交易することが可能であったことである。その過所取得の審査内容も、内地州縣の「百姓」としての商人が、本貫を離れる際に過所を取得する場合と異なるところは全くうかがえない。⁽²²⁾

このことは、彼らが内地州縣「百姓」の商人と全く同じ條件で唐内地を往來できたことを示している。また外來ソグド商人の中には、邊州に留まる者もいたと考えられるが、先の「戸部格殘卷」では、西・庭・伊州に附貫したものは、公文があれば本貫以東への交通を許可しているが、あるいはこれはこうしたソグド人を對象とした規定であった可能性もあるう。

ところで、こうした本貫を離れる際に取得する過所の審査で特徴的なのは、保人（連保人、連答人）が、申請者の率いる人畜の身元を保證することが必須であったことにあるが、この外來ソグド商人の場合も、入境のための過所を申請するためには、既に見たように保人を揃える必要があった。前掲の文書には、以下のような保人が名を連ねている。

- イ、庭伊^{てい}百姓康阿了
- ロ、伊州百姓史保
- ハ、庭州百姓韓小兒
- ニ、烏耆人曹不那遮
- ホ、高昌縣史康師

保人はその名から判断して、西・庭・伊州の三州を本貫とするソグド人三人と漢人一人および安西都護府下の焉耆都督府のソグド人一人から構成されている。中には、（ホ）に見えるように、高昌縣の胥吏である史となっていたソグド人も名を連ねている。おそらくは州司に辭を出す段階で保人を用意しなければならなかったものであろうが、そのメンバーから見て、外來ソグド商人らは、唐の州縣「百姓」として境域オアシスに定着するソグド人らと密接な結びつきがあったものと推定される。こうした彼ら相互のコネクションが、私的な外來ソグド商人の唐内地への入境をシステムティックなもの

にしていたと見られる。

また、入京にあたって京城の四面關を越えるのであれば、通常の入境者であれば敕許を得なければならぬところであるが、外來ソグド商人への過所發給のあり方を見る限りそうした様子もなく、彼らの入境がなかば日常化していた様相がうかがえる。前節で検討したように貞觀四年の時點では、ソグド商人も他の諸國と同様に邊境において交易が許されるかどうかの段階にあったことを考えれば、その後、彼らの商業活動の狀況が大きく變化したことになる。ただし、先に検討した武后期、垂拱元年（六八五）の詔敕の發布が、これを機に民間のソグド人に入朝を果たす道を開いたものではなく、それまでのソグド人の入境の現状を追認したに過ぎないものであることは、本節で検討した先の文書の年月日が、この詔敕の發布以前であったことから明らかである。また後節に検討する文書からも、高宗、總章年間ごろには、既に多くの外來ソグド人が唐内地に入境していたことをうかがうことができる。

そこで想起されるのは、貞觀四年以降、唐の勢力が西域に擴大し、高宗期にはパミール以西にまで數多くの羈縻州府を設置することになっていくことである。⁽²⁵⁾このとき、入蕃の概念も「波斯」にまで擴大し、⁽²⁶⁾名目的にはソグディアナ周邊諸國の民すべてが、唐の羈縻州府民となっていた。ソグド商人は、こうして構築された唐との新しい關係のなかで、高宗期以降、積極的に唐内地へ入境していったことが容易に考えられる。

以上の検討より、唐の羈縻州府民ともなっていた外來ソグド商人の入境に際しては、いわゆる入國審査なるものは全く認められず、過所を取得することによって日常的に唐領内に入境していたことがうかがえる。唐の周邊諸國でも、こうした入境は、外來ソグド商人にのみ公認された特殊な状態であったものと考えられる。ただし彼らは、前掲の「戸部格殘卷」にあるように、唐内地に入境後は、歸蕃することは許されない建前になっていたが、その實態はどのようなになっていたであろうか。

三 外來ソグド商人の交易活動圈

前節において検討したように、外來ソグド商人が積極的に唐内地に入境するようになるのは、高宗時代以降のことと思われるが、トゥルファン出土文書には、この時期の彼らの商業活動の一端についてうかがうことのできるものがある。

『文書』編纂者によって「唐西州高昌縣上安西都護府牒稿爲錄上訊問曹祿山訴李紹謹兩造辯辭事」と題された文書であり、先ずこれを取り上げておきたい。本文書は、十斷片より成り、本稿ですべてについて検討する餘裕はないので、『文書』において冒頭に配されている二斷片(66TAM61:17b):23b, 27/2, 27/1b)〈寫〉『文書』[參]二四二—二四三頁、〈錄〉『文書』六、四七〇—四七三頁⁽²⁷⁾に限り、錄文と和譯を以下に掲げておきたい。

① (本斷片の冒頭二行には奏疏の草稿が記されるが、ここでは省略する)

1 高昌縣 牒上安西都護府

2 曹祿山年卅
(依檢?)

案內

3 (獲得) 上件人辭稱、向西州長史□
□□

4 在弓月城有京師漢名□
□□

5 在弓月城舉取二百七十五疋絹、向龜

6 (茲。阿兄?) 相逐、從弓月城向龜茲。阿兄更有

7 (馬) 駝兩頭、牛四頭、驢一頭、百疋絹價華

8 并椀、別有百疋絹價財物及漢鞍衣裳

- 9 調度。其李三兩箇相共從弓月城向龜茲。
 10 不達到龜茲。其李三是漢、有氣力語行。
 11 身是胡、不解漢語。身了知此間□□、

(後 缺)

(和譯)

高昌縣より安西都護府へ牒をもって上申いたします。

曹祿山 年三〇歳。

申し上げます。上件人の辭を得たところ、「西州長史に對して……。弓月城に京師の漢人で李というものが居り、……弓月城で二七五疋の絹を〈兄より〉借り受け、龜茲へ向かいました。(兄も?)ともに利を求め弓月城より龜茲へ向かいました。兄は別に、馬□疋・駝兩頭・牛四頭・驢一頭・百疋絹價の華□や椀、さらには百疋絹價の財物及び漢の鞍・衣裳・調度品を持っていました。李三〔李紹謹〕と二人とともに弓月城より龜茲へ向かいましたが、〈兄は〉龜茲には到着しませんでした。李三は漢人であり、熱辯をふるって釋明いたしますが、私は胡人であり、漢語は理解できません。私は、こちら(の状況?を)はつきり擱んでおり、……。

②

(前 缺)

1

□□有所歸、請乞禁身、与謹對當□□。
(28) (考)

2

問得款、李謹當時共兄同伴、向弓月□□。
(城?)

3

并共曹果毅及二并外生居者去同□□。
(?) (月)

4 其曹果毅及曹二留住弓月、其李三□□^城

5 兄邊取練訖分明付、兄与李三同□□□□^(安)

6 西。李三見到、唯兄不來、既是□□□□安

7 西。兄不至、所以陳訴、更無□□□□、又問祿^{安西}

8 山得款、別兄已來、經四年□□□□^(曹果)、曹二

9 胡輩處指的同學練□□三。身及外^(李)

10 生兒逐李三後去。其曹果毅、曹二是胡、

11 客京師、有家口在。身當來日、留住弓

12 月城在、身亦不在弓^{月城}。當李三共

13 □□去時、弓月□

(後 缺)

(和譯)

……歸する所となっています。なにとぞ身柄を拘束して、李紹謹と相對して取り調べられますことをお願い申しあげます。」と言っていました。〈そこでまず〉祿山を尋問して得た款には、「李紹謹は當時、兄と同行して弓月城へ向かいました。併せて曹果毅および曹二〔曹畢娑〕、さらには同居する外甥〔姉妹の息子〕も共に〔弓月城へ?〕往きました。曹果毅および曹二は、弓月城に留住しておりましたが、李三は兄より練を借りて受け取りおわると、兄とともに安西に〔再び向かいました〕。李三は現に到着しているのに、ただ兄だけはやって來ませんでした。既に安西……、兄は安西に到着しませんでしたので、そこで陳情申し上げることにいたしました。更に……はありません。」

とあります。さらに祿山らに尋問して得た款によれば、「兄と別れて以來、四年経過していますが、曹果毅と曹二らの胡輩たちは（知見人として）畫指したものであり、（彼らと）ともに（來て）絹を借り受けたのは李三であります・私および外甥は李三の後を追っていきました。曹果毅、曹二はともに胡であり、京師で家族とともに客住しています。私が（こちらに向けて）發とうとした日には、（曹果毅、曹二らは）弓月城に留住して居りましたが、（今、彼らと同じく？）私もまた弓月城を不在にしております。李三は（兄？と）ともに（安西へ）往く時に當たり、弓月城……。」とあります。

本文書が、高昌縣より安西都護府に上申した牒であることは①の冒頭の行より明らかであるが、文書題名にもあるように、牒そのものではなくその草稿であった。これまでも多くの研究者が引用しているが、黄惠賢氏⁽²⁹⁾以外は本格的に分析したものではない。ここでは、黄氏の分析も参考にして當文書について検討を加えておきたい。

本文書には紀年部分が脱落しているので、先ず文書の年代を確定しなければならないが、これについて黄氏は、總章元年（六六八）より咸亨元年（六七〇）四月以前と見なしている。これは上限については、裏面に記されている公文書の紀年（麟德二年（六六五））とそれが廢棄されるまでの期間を想定し、下限については安西都護府が龜茲に置かれていた時期を⁽³⁰⁾勘案した上で決定したものである。しかしながら、高昌縣から直接、安西都護府へ牒上していることから見て、これは安西都護府が西州に置かれていた時期と判斷するほうが妥當であろう。即ち、上限は、吐蕃によって安西四鎮が陷され、安西都護府が西州に戻された咸亨元年（六七〇）四月、⁽³²⁾下限は出土古墓の被葬者の没年である咸亨四年（六七三）⁽³³⁾とみなされる。

先に掲げた文書の内容については、細部では解釋が困難な點が残されているが、一應和譯を附しておいた。他の文書斷片も含めて見ると、大まかなところでは、本案件は以下のように理解できよう。

まず基本的には、債権者であるソグド人の曹祿山の兄（曹炎延）と債務者である漢人の李紹謹（李三）との間に生じた、絹の貸借上のトラブル訴訟が案件の内容であり、實際にこれを西州の官司に訴え出たのが祿山である。①の冒頭で、訴え出た祿山の辭が引用されており、それは②の一行目まで續いていると判断できる。その後の高昌縣での審議過程では、關係者より多くの供述（款、くちがき）が取られているが、②には祿山の供述調書だけが見えている。

全體を通した上で判断すれば、李紹謹は曹炎延より弓月城（イリ盆地のクルジャ附近）⁽³⁴⁾において絹二七五疋を借りており、その後に兩者がともに弓月城より龜茲（安西）に旅立っている。ところが、曹炎延は龜茲に姿を見せなかったことから、弟の祿山は李紹謹に返済を迫るべくお上に訴え出たのである。また絹を借りた際に、知見人となったのが、②に見える曹果毅と曹二（畢婆）とであった。そのことは別の文書斷片からもうかがえ、さらに同文書には、彼らが弓月城よりさらに西に向かったことが記されている。⁽³⁵⁾

①によれば、絹を借りた漢人の李紹謹は、京師の人であり、②によれば、知見人となった曹果毅と曹二も、家口とともに京師に客居するものであった。また曹炎延・祿山兄弟も、京師より來ているらしいことは、黃憲賢氏の指摘する通りである。⁽³⁶⁾さらに②では曹果毅・曹二が「胡」であることが明らかにされており、また曹祿山も①で自ら「胡」であると表明している。⁽³⁷⁾別の文書斷片に見える李紹謹の款では、龜茲より同行した曹炎延らソグド人を指して「興生胡」と記しているが、これは次節に見るように、本稿で謂う外來ソグド商人を指している。このことから、彼らが唐建國以降に唐内地に入境し、京師に寄住していた外來ソグド商人であることがわかる。

以上のことから、京師に寄住する外來ソグド商人が、京師の漢人とともに、安西（クチャ）や弓月城（イリ）、さらにはそれ以西にまで、廣範圍に商業活動を展開していたことがうかがえる。

本文書が示す内容は、唐が龜茲の安西都護府を西州に撤退させる直前、即ち咸亨元年（六七〇）四月を遡ること久しからざる時期のことであったことは容易に推測できる。この時期は、唐が阿史那賀魯の亂を鎮定して、唐の西域支配を擴大

させていた時ではあるが、天山以北の情勢について言えば、六六七年に五弩失畢部を統轄していた繼往絶可汗が没し、唐は傀儡的な可汗を失う時期であった。⁽³⁹⁾ 政治的な状況だけを見れば、當時のイリ盆地周邊がとも唐の實質的な支配下にあったとは思えない。それにもかかわらず、多くの京師の胡・漢の商人がそうした地にまで進出して活潑に交易を展開していたのである。もちろんこれは、イリが天山以北を東西に走る交易ルート上の中樞点であったからに他ならない。

しかしながら、先に検討したように、唐内地に入境した外來ソグド商人は、内地州縣の「百姓」同様に、蕃域に入ることとは許されない建て前であった。これは先の垂拱三年の詔敕發布に關わりなく、唐の律令に基づく支配の論理構造から判斷して、唐初よりの外交方針であったと思われる。さらには邊州での交易活動についても種々厳しい規定が設けられていた。⁽⁴⁰⁾ 關市令によれば、「諸そ、錦・綾・羅・縠・紬・綿・絹・絲・布・氍牛尾・眞珠・金・銀・鐵は、并びに西邊、北邊の諸關を度ること及び緣邊の諸州に至りて興易するを得ず。」と規定され、邊境域においては、基本的な交易品ともなる絹全般に亘って關外に持ち出すばかりでなく、邊州においても許されていなかったのである。先の垂拱三年の詔敕も含めて、こうした法的な規制が、外來ソグド商人の活動を規制する場合もあった可能性もあるが、⁽⁴¹⁾ 少なくとも前掲文書の外來ソグド商人に關する限り、そうした規制が現實的に働いていたとは認めがたい。

このことに關連し、西域支配が強化される八世紀にあつて、『唐會要』卷八六關市的條に、

天寶二年十月敕すらく、聞くが如くんば、關已西の諸國、興販の往來は絶えずと。託するに利を求むるを以てすとも雖も、終には外蕃に交通し、因循なること頗る久し。殊に穩便に非ず。今より已後、一切禁斷す。仍りて四鎮節度使及び路次由る所の郡縣に委ねて、嚴に捉搦を加え、更に往來あるを得ざらしめよ。

とあるように、蕃域への興販（商人）の往來を嚴禁する詔敕が出されていた。この興販の中に、唐内地に入っていた外來ソグド商人が含まれていたであろうことは容易に推測され、彼らの歸蕃を嚴禁する法規が具文となっていたことを雄辯に物語っている。『慧超往五天竺國傳』の建駄羅國の條にも「漢地興胡」が見えており、近年の譯注では「中國からやって

くる興胡」と解している。⁽⁴²⁾ここに言う興胡は、明らかに外來ソグド商人のことを指しており、これによれば、彼らは中國からガンダーラにまで往つていたことになる。またタバリーの年代記にも⁽⁴³⁾イسلام曆一〇四年(七二二年六月)七二三年六月)の記事に、ホラーサーンを統治するサイド・イブン・アムル・アル・ハラシーとソグド人たちの軍團との間で戦鬪が行われていたことが伝えられているが、その中でソグド人たちがムスリムの囚人を虐殺したことをめぐって、

(ソグド人たちがムスリム囚人を殺害したという)その報告が眞實であることがわかると、アル||ハラシーはソグド人たちを死に處するよう命じた。しかしながら、彼は先ずその中から商人たちを選び分けた。彼らは莫大な商品をもつ有する商人たちで四百人もおり、その商品は中國からもたらされていたのである。

と見えている。これによれば、開元十年ごろにソグディアナと中國を往來する商人が相當の數存在していたらしいことがうかがえる。さらには、八世紀のムグ文書(B-27)は、漢文文書の紙背を利用してソグド語で一日ごとに銅錢の數が書かれているものであるが、⁽⁴⁴⁾既に吉田豐氏により検討されているように、⁽⁴⁵⁾日附がソグドのカレンダーによる日の名稱でなく、一〇三〇までの數字で表されていること、中國國內で書かれたいわゆる「古代書簡」でも、日附は數字で表記されていること、また漢文文書の裏を利用していることから、裏のソグド語文書も中國國內で書かれたものと推測している。さらにこのことから、この文書の存在は、八世紀初めソグド商人が、中國とソグドとを行き來していたことの直接の證據になると主張されている。もちろん、中には朝貢使節に伴つて入朝したものもいたであろうが、これらの史料はかなり日常的にソグド商人が唐とソグディアナを往來していたことを示唆している。

以上の検討から、唐の前半期を通じて、外來ソグド商人の中には、唐内地と蕃域との間を、規制に反して邊境の關門を越えて往來するものが少なくなかったことが認められ、それらかなり日常的なものであったらしいことがうかがえる。

こうした交易狀況の背景には、外來ソグド商人が邊境州縣で過所さえ取得すれば容易に唐内地に入境できる體制があったものと見られる。ではこうした外來ソグド商人は、唐領内において如何なる存在として唐に掌握され、こうした交易活

動を展開していたのであろうか。

四 羈縻州府「百姓」としての外來ソグド商人

はじめに述べたように、ソグド人自身は、唐の建國以前より中國領内に入り込み商業活動をしていた。従って、ソグド人を掌握すると言っても、唐建國以前に既に中國内地に定住していたソグド人と建國以降に新たに流入してくるそれとを考へなくてはならない。

遅くとも魏晉以降、ソグド人は中國領内に聚落を構え、それを據點として交易活動をしていたが、北魏以後には「薩寶」と呼ばれる聚落の統率官が置かれるとともに、それぞれの聚落には自治權が與えられていたと考えられている。⁽⁴⁶⁾即ち、彼らはまったくの外國人として扱われていたのである。

これらソグド人聚落や「薩寶」に對するこれまでの分析は、中國の各王朝、就中、北魏より隋唐期までを一括して論ずることが多く、その中での聚落や「薩寶」官の性格の變化については全く考慮していない。結論を言えば、既に別稿で論じたように、⁽⁴⁷⁾その性格は唐の前後で大きく變化したと認められる。即ち、唐が成立すると、それまでの自治的聚落は、律令支配の貫徹を目指す唐の州縣下に組み込まれ、そこに屬していたソグド人も唐の州縣「百姓」、⁽⁴⁸⁾即ち州縣が定期的に作成する籍帳に彼らを良人として編戸していったのである。要するに、唐の律令支配體制のもと、それまでの聚落のソグド人は、漢人との區別なく、一様に唐の「百姓」となったとみてよい。

さらに高宗の時代に西域に支配圈が擴大すると、西域諸國に羈縻州府が置かれていったが、この羈縻州府に屬す民も、同じく唐の「百姓」となっていたことは、羈縻州府コータンにおいて作成された、税役の減免等を指示する官文書中に、羈縻州民を「六城（州）傑謝百姓」⁽⁴⁹⁾としている例によりうかがえる。さらにトゥルファンの官文書には、羈縻州府ばかりでなく羈縻部落民をも「處蜜部落百姓」⁽⁵⁰⁾とするものもある。これらの點から見れば、ソグディアナのオアシス諸國の

民も、律令支配の論理の上では、唐の羈縻州府「百姓」として組み込まれていたと推測される⁽⁵¹⁾。第二節で見たように、外來ソグド商人が唐内地に入境し活潑に商業活動を展開したのは、こうした唐による羈縻州府設置以降のことであったと考えられるのである。

さて彼ら外來のソグド商人が、唐内地においてどのように唐に管掌されていたのかは、既に多くの研究者により引用されているが、次の文書が参考となろう。

「唐開元十六（七二八）年北庭金滿縣牒」（『金滿』縣之印、有鄰館15、『籍帳』三五四頁。）

1 金滿縣 牒上孔目司

2 開十六稅錢、支開十七年用。

3 合當縣管百姓・行客・興胡、惣壹阡柒伯陸拾人。見稅錢、惣計當

4 貳伯伍拾玖阡陸伯伍拾文。

5 捌拾伍阡陸伯伍拾文、百姓稅。

（後 缺）

（和譯）

金滿縣より孔目司へ牒をもつて上申いたします。

開元十六年の稅錢を、開元十七年の支出に用いる（件）。

當縣の管掌する百姓・行客・興胡を合わせると、總計一、七六〇人となります。現在の稅錢額は、總計二五九、六五〇文です。

八五、六五〇文、百姓の稅錢。

□ () 文、行客の税錢。□
 □ () 文、興胡の税錢。□

(後 缺)

これによれば、北庭都護府管下の金滿縣に附籍される「百姓」と並んで、「行客」(本貫を離れた客・客戶を指す)⁽⁵²⁾とともに「興胡」が見えており、彼らが開元一六年分の税錢を納入していたことが知られる。この「興胡」が、ここで問題としている、日常的に入境してきている外來ソグド商人であることは、第二節に掲載した文書の③に見える外來ソグド商人の康紇様「興生胡」(興胡はその略稱)⁽⁵³⁾の肩書きを、官司において附されていたことからうかがえる。さらにこれは、既に指摘されているように、⁽⁵⁴⁾「儀鳳三年(六七八)度支奏抄・金部符」の一條に、

□(二) 雍州諸縣及諸州投化胡家、富者□^(丁別)□

毎年請税銀錢拾文、次者丁別伍文、全

貧者請免。其所税銀錢、毎年九月

一日以後十月卅日以前、各請於大州

輸納。

(和譯)

(一) 雍州諸縣及び諸州の投化の胡家は、富者は丁ごとに毎年銀錢一〇文を税として徴収するよう求めおく。次者であれば、丁ごとに五文とする。全貧者は、税を免するよう求めおく。税として徴収する銀錢は、毎年九月一日より一〇月三〇日まで、各々、大州に於いて輸納させるよう求めおく。

と見える「投化の胡家」と同一のものであったと思われる。これによれば、彼らは入境後、雍州(京兆府)諸縣とともに廣

く諸州に管掌され、「富者・次者・貧者」に應じて税錢を納入しなければならなかったことがうかがえる。中村裕一氏は、先の「唐開元十六年北庭金滿縣牒」に見える「百姓・行客・興胡」の分別を「編籍による分類」と指摘されている。⁽⁵⁵⁾つまり「興胡」とは、同じく外來ソグド商人を指す「投化胡家」とか「商胡」などの呼稱とは異なり、「行客」と並んで、寄寓地となる州縣で附籍される場合の公的な身分名稱ともなっていたのである。

このことより、外來ソグド商人は、朝貢に附隨して來朝し唐に在留するものと異なり、必ず何れかの州縣に歸屬し附籍されていたことがうかがえる。ただし、彼らは唐の州縣に附籍されるとは言っても、その所屬する州縣「百姓」となるわけではない。この點では、本來州縣「百姓」であつたものが、本貫州を離れて寄寓地の州縣で附籍された「行客」が、その州縣の「百姓」とならないのと同じ扱いである。即ち、「興胡」も「行客」も、本來「百姓」であつたものが、本貫ではない寄寓地の内地州縣で「百姓」とは別に附籍され、その富裕度に應じて税錢を負擔していた。その上で、はじめて彼らの活動が許されていたのである。

そこで注目されるのは、既に種々検討されている次の賦役令の一條である。⁽⁵⁶⁾

諸そ諸國【蕃胡の内附せし者は】、亦、定めて九等と爲し、四等已上を上戸と爲し、七等已上を次戸と爲し、八等已下を下戸と爲す。【上戸は丁ごとに税銀錢十文、次戸は五文、下戸は之を免す。貫に附して二年已上を経たる者は、

上戸は丁ごとに羊二口を輸し、次戸は一口、下戸は三戸共に一口。】⁽⁵⁷⁾（羊無きの處は、白羊の估に准じ、輕貨を折納せよ。若し征行有らば、自ら鞍馬を備えしめ、三十日已上を過ぐる者は、當年の輸羊を免す。）

本條文は、銀錢や羊という徴收物の内容から、主として西北邊の遊牧・オアシス民を對象としたことは明らかである。またこの令文の【】は武德令に存在していたと見られるので、⁽⁵⁷⁾この時點で西北方面の内附者に對する賦役規定が考えられていたことになる。石見清裕氏によれば、これはソグド系内附者と北方遊牧民系内附者（靺廼州府民）に對する規定が合わさつたものであり、本來賦役令の一つの條文中に複數種の内附者を對象とする規定が記されていたとされる。⁽⁵⁸⁾とすれば、

後の高宗期に西域方面に羈縻州府が設置され、蕃國の民が「歸化在蕃者」（蕃域に在る歸化人）となった時には、律令法の上では、名目的なものながら、これが彼らに適用される税役規定として觀念されていたのではなからうか。既に大津透氏により指摘されるように、⁽⁵⁹⁾同じく銀錢で表示される、先の「投化の胡家」が負擔した税額と本賦役令に示される税額とは一致している。つまり、外來ソグド商人が内地諸州で附籍され負擔していた税錢とは、本來の羈縻州府の「百姓」として負擔すべき税賦であつたのである。彼らが唐内地に入境し歸蕃が許されない存在となつた段階で、唐の羈縻州府「百姓」としての立場とその賦役負擔が實體を伴うものとなつていったと言えよう。換言するならば、彼らが唐内地へ入境することは、内地での彼らが「投化の胡家」とも呼ばれるように、内地への投化（歸化）と見なされ、それまでの【蕃國の民／羈縻州府「百姓」】の彼らが、歸蕃できなくなる規定によつて【羈縻州府「百姓」】となると同時に、「百姓」でありながら本貫に歸らない存在となつていく過程でもあつたのである。

これまで、蕃域（外地）の羈縻州府については、單に名目的な設置と見られてきたが、唐は内地領内において彼らを、律令に基づく帝國的支配の論理の上に、本貫を離れた唐の羈縻州府「百姓」として受け入れ、同じく本貫を離れた内地州府「百姓」であつた「行客」とともに、寄寓地の州縣で附籍することを認めたのである。そして彼らは寄寓州縣を據點として、既に内地州府の「百姓」に組み込まれていたソグド人を保人として過所を取得し、様々なレベルで交易活動を展開していたものと考えられる。⁽⁶⁰⁾

結びに代えて

唐王朝は、律令支配の根幹をなす原則である本貫地主義に基づき、定期的に作成する籍帳に「百姓」を編戸した上で、極力その移動を制限する方針を保持していた。もちろん内地と外地との明確な區別は存在するが、律令に基づく帝國的支配の論理から見れば、周邊世界にまで州縣下に編戸される「百姓」は擴大していった。しかしながら周知のごとく實際に

は、唐は「百姓」でありながらも本質を離れ、寄寓地で附籍される人々を認知せざるを得なかった。それは唐内地の「行客」ばかりでなく、外來ソグド商人も唐の帝國的秩序の構造からすればそうした人々であったのである。

ただし、詳しくは別稿に譲らざるを得ないが、彼らの移動は、過所に依ったので、定められた公道を外れたり引き返したりすることは許されず、唐の厳しい交通管理下に置かれるものでもあった。先の第二節に掲げた文書のケースで見れば、彼らは京師が目的地とされているので、必ず公道に沿って西州府より京師を目指さねばならなかった。また地方州府であれば、どこへでも交通を許可する過所が發給できたかどうかは疑わしく、とりわけ長安への交通を許可する、つまり京城四面關内への「勘入」を請求する過所が發給できたのは、特定の官府に限定されていた可能性は高い。⁽⁶¹⁾京城四面關を通る驛道上に在る、安西・北庭兩都護府や西州都督府などはそうした官府であったものと考えられる。

こうした體制の下に、安西・北庭やトゥルファンといった境域オアシス都市は、西方から來る商人等にとって、唐の帝都と直結する陸の寄港市と化していたものと見られる。

さらに、ある意味では長安と西域を往來する外來ソグド商人の活動が、西邊境域地域に集まるものばかりでなく、文化・情報などを帝都に集める機能を果たしていた側面もあろう。反對に中國内地からも西域地域へ人やもの・文化が擴大していたが、それらの流れを保證していたものこそ、唐内地と西邊境域地域とを結び附けていた唐の幹線公路と、その上に形成された周到な交通システムであったのである。⁽⁶²⁾

またこのようにソグド商人の京師への移動を保證しようとする唐の志向は、隋の裴矩の「商胡招致策」に代表されるように、北魏以來、北朝系の政權が一貫して採ってきた政策を踏襲したものであると考えられる。⁽⁶³⁾これは、中國西方の邊境域にソグド商人らを足留めにさせないようにするのが目的でもあり、おそらくは先に述べた側面、即ちものだけでなく、文化・情報などの中國中樞への流入が滯ることを回避しようとしたためと推測される。

そもそも、先にも述べたようにソグド商人は、唐の勃興以前に既に、多くが中國周邊の世界に移住してきており、交通

の要路上に彼らの聚落を形成していた。實態は明確ではないが、そうした商業上の據點を結んで、彼らがある種のネットワークを形成していたことは疑いないであろう。唐はこれらソグド商人を、中國内地および周邊世界において、經濟的な側面ばかりでなく、政治的にも社會的にも大きな影響力を有する情報に通じた存在として認め、彼らを積極的に取り込もうとしたと想像される。唐が遠くソグディアナ周邊諸國に數多くの羈縻州府を設置し、それらを支配秩序に組み入れていたのも、唐のかかる姿勢を無視しては理解することはできない。

唐王朝は、その前半期において、中國内地ばかりでなく周邊の蕃域にも羈縻州府を設置し、内地州府とは明確に區別されるものの、唐の州府に附籍される「百姓」を押し擴げていった。とりわけバミール以西にまで羈縻州府を設置して、西方に大きく膨張するかたちで唐の州府を擴大させていたことは、既に見たとおりである。唐におけるソグド商人らの活動は、こうした唐の支配秩序の周邊への擴大を背景に生まれてきたものであり、律令に基づく帝國的支配の論理からすれば、彼らは唐の羈縻州府「百姓」でありながらも本質を離れ、唐内地の寄寓州縣で附籍されることを許された商人となっていた。そして官司が發給する過所によって、唐はそうした彼らの移動を保證するとともに、その帝都にも結び附けていたのである。

はじめにも述べたように、ソグド商人の中國内地への活動は唐以前からのものであり、既に外國人として中國内地に自治的な聚落さえも作り上げていたが、唐帝國の成立は、そうした唐以前の時代における彼らの活動の様相を一變させるものであったことを銘記しなければならない。

【略號】

『文書』……國家文物局古文獻研究室・新疆維吾爾自治區博物館・武漢大學歷史系編『吐魯番出土文書』一一一

〇、文物出版社、一九八一—一九九一年。

『文書〔壹〕肆』……中國文物研究所・新疆維吾爾自治區博物館・武漢大學歷史系編『吐魯番出土文書〔壹〕肆』

文物出版社、一九九二—一九九七年。

TTD ……T. Yamamoto(eds.), *Tunhuang and Turfan Documents concerning social and economic history I, (A) (B), The Toyo Bunko*, 1978, 1980.

『籍帳』……池田溫『中國古代籍帳研究』一九七九年、東京大學出版會。

註

(1) 榎本淳一「『小右記』に見える「渡海制」について——律令國家の對外方針とその變遷——」山中裕編『攝關時代と古記録』吉川弘文館、一九九一年、一七三頁。

(2) 榎本淳一「『性靈集』に見える「竹符・銅契」と「文書」について」『日本古代の傳承と東アジア』吉川弘文館、一九九五年、四六五～四六八頁。

(3) 多くの論著があるが、北方遊牧民とのそれについては、松田壽男「絹馬交易覺書」「絹馬交易に關する史料」『松田壽男著作集二 遊牧民の歴史』六興出版、一九八六年、一四〇～一七九頁などがある。

(4) 通常ソグド商人と言えば、ソグディアナ出身の商人を指すが、唐に進出していた「商胡」や「興胡」の中には、周邊のトハリスタン等の出身者なども含まれていた可能性はある。本稿では、便宜上、そうした出身者も含めてソグド商人と呼んでおく。

(5) 渡邊信一郎『天空の玉座——中國古代帝國の朝政と儀禮——』柏書房、一九九六年、二三八～二四七頁。ただし石見清裕氏

によれば、羈縻州府は外地と内地のそれとに區別されるので、先に掲げた三つが截然と分かれているわけではなく、内地諸州府と遠夷の雙方に跨るかたちで、羈縻州府が置かれていたと見た方がよい。石見清裕「唐の内附異民族對象規定をめぐって」『中國古代の國家と民衆』汲古書院、一九九五年、四一六頁。もちろん、朝貢・冊封・羈縻・内地化などの段階を設定して、周邊異民族との關係を捉える見方もある。これも含めて羈縻州をめぐる諸問題については、片山章雄「羈縻州」「アジアの歴史」(第一篇 中國、四章 隋唐、問題點の提起二)南雲堂、一九九二年、八四～八五頁参照。

(6) 石見清裕「唐代外國貿易・在留外國人をめぐる諸問題」『魏晉南北朝時代史の基本問題』汲古書院、一九九七年、六八～七一頁。

(7) 『舊唐書』卷一九四、突厥傳下(『資治通鑑』卷二二三、開元一四年(七二六)一二月の條)。「文書」八、八四～九〇頁に見える文書史料も、遊牧民との互市交易に關するものである。

(8) 商胡は、唐によって波斯や大食とは區別される存在として認識されていたことがうかがえ、必ずしもイラン系商人を總稱する語として使用されていたわけではない。『舊唐書』卷一一〇鄧景山傳の「商胡大食波斯等商旅死者數千人。」も、「商胡・大食・波斯らの商旅の死する者は數千人なり。」と讀むべきであろう。

(9) 唐では使節の往來にかかわる負擔すべてを國家丸抱えにする體制から、送迎する州縣の負擔も甚大であり、そのため朝

貢使そのものを當初より一貫して厳しくチェックする體制にあった。邊州の負擔については、先の『通鑑』の史料にも見えているが、さらに「進奉」に關して、八世紀後半の史料（河西節度使判集）にも、諸國の首領に糧食を停止する判文に、「沙州の糧を率^さむるは、辛苦ならざるに非ず。首領、進奉するに、此に憑^{たも}りて興生す。遠く自り來りて、誠に合^{あは}に^んに當るべきと雖も、淹に留り且つ久しければ、資糧を^{やせ}達^たらせ難し。理は適時を貴べば、事は宜しく停給すべし。」（ペリオ二九四二、『籍帳』四九五頁）と見えている。この判文における諸國の首領とは、西域諸國の首領を指すものと考えられ、彼らが進奉の機會に交易に勵み、そのまま滯留する傾向にあった爲に、送迎する邊境の州縣の負擔が過重となっていたことを傳えている。なお西域諸國の統治者を首領と表現することは、『西蕃胡二十七國の首領』と見える『隋書』卷六七裴矩傳など參照。

- (10) 「壓良」が「壓良爲賤」であることは、戶婚律「放部曲奴婢遺壓」の條および『資治通鑑』卷二八三、後晉紀四齊王天福八年（九四三）、二月丙子（二八日）の條參照。後者には、「自烈祖相與、禁壓良爲賤」の胡三省の注に「良人の子女を買いて奴婢と爲す、之を良を壓して賤と爲すと謂う。律の禁ずる所なり。」と見えている。また「詿誘」は、張九齡『曲江集』卷十一「敕吐蕃贊普書」等にも見えるように、人をかどわかす意味で用いられている。「寒盜」については、拙稿「唐の州縣百姓と過所の發給—唐代過所公驗文書簡記(1)—」

『史觀』一三七、一九九七年、一〇〇—一頁參照。

- (11) 「冒名假代」の意味については、衛禁律四「宮殿門無籍」の條、同二三「宮門等冒名守衛」の條および『譯註日本律令六唐律疏議譯註篇二』二一・六九頁參照。

- (12) ①と②の間は、現在は切り離されて臺紙に貼られているが、本來は紙がここで貼り繼がれていたことは、紙縫背に書かれた「亨」のサインの存在から疑いない。

- (13) 前掲註(10)拙稿、七二〇頁。

- (14) 『文書』九、六一頁には、「辯」辭冒頭の供述者名の下に畫指が、またその末尾に「典康仁依口抄并讀示訖。」と記されているものがある。これは「書記の康仁が口書きをし、併せてそれを（供述した本人の前で）讀み示し終えた。」後に供述者が畫指したことを意味している。サインした例はまだ知られていない。

- (15) 譯語人については、李方「唐西州的譯語人」『文物』一九九四—二、四五—五一頁等參照。

- (16) 「nynprn」（ナナイ神の恩恵）。Dieter Weber, Zur sogitischen Personennamengebung, *Indogermanische Forschungen* 77, 1972, p. 198. に「寧寧忿」が、吉田豊「ソグド語の人名を再構する」『ぶつくれつ』七八、一九八九年、七一頁に「寧寧忿」と並んで「那甯藩」があげられている。また、N. Sims-Williams, *Sogdian and other Iranian Inscriptions of the Upper Indus* (Corpus Inscriptionum Iranicarum, Part II, Vol. III/II) II, London, 1992, pp. 60-61. 參照。

- (17) 前掲註(10)拙稿、一一—一四頁。

(18) 『文書』九、四四～四七頁。詳しくは別稿で論ずる。

(19) 程喜霖『《唐垂拱元年（六八五）康尾義羅施等請過所案卷》考釋』、『魏晉南北朝隋唐史資料』一一、一九九一年、二四一頁。

(20) 詳しくは觸れられないが、この公文が來文を指すことについては何の問題もない。また來文としては、過所だけでなくいわゆる公驗もあるが、關を度るには過所を必要とする。過所と公驗については、礪波護『唐代の過所と公驗』、『中國中世の文物』京都大學人文科學研究所、一九九三年、六六一～七二〇頁に關連史料・論著が網羅されている。

(21) ただし七世紀においては、安西四鎮をめぐる唐は吐蕃と抗爭を繰り返しており、本文書の垂拱元（六八五）年に、唐が西域支配を回復していたかどうかは確定されていない。森安孝夫『吐蕃の中央アジア進出』、『金澤大學文學部論集 史學科編』四、一九八四年、一六頁・六五頁註(76)。本文書にも、「西に在っては誰も通行を規制するものはなく」とあり、唐の安西四鎮が再置されたとみなすことには疑問が残ろう。しかしながら西州府が外來ソグド商人に對して、既に唐の來文（過所）を携帯していることを期待していたことは疑いなく、北庭（庭州）經由の場合もあり得るが、四鎮すべての回復はともかく、少なくとも安西都護府は龜茲に戻っていた可能性はあろう。

(22) これについても、註(18)に同じ。

(23) 保人は内地州縣の「百姓」となっていたが、この垂拱年間には「阿」(Tyw)のように胡風の名前を持つ者がまだい

たことが知られる。N. Sims-Williams, *ibid.*, p. 68. 参照。
なお「阿」がソグド語の tyw の漢字音寫であることを、吉田豐氏よりご教示いただいた。

(24) 礪波護『唐代の畿内と京城四面關』唐代史研究會編『中國の都市と農村』汲古書院、一九九二年参照。

(25) 『舊唐書』卷四〇地理志三などに「西域十六都督州府」として、龍朔元年（六六一）に、于闐より以西、波斯以東の地に、都督府一六（または八）、州八〇（または七六、八八）、縣一一〇、軍府一二六を設置している。

(26) 『唐會要』卷一〇雜錄には「聖歷三年三月六日敕すらく、東は高麗國に至るまで、南は眞臘國に至るまで、西は波斯・吐蕃及び堅昆都督府に至るまで、北は契丹・突厥・赫靺に至るまでを、並びに入蕃と爲す。以外は絕域なり。其の使、應に料を給うべきは、各、式に依れ。」と見え、七世紀末ごろの唐にとっての遠夷（入蕃）の國が具體的に示されている。これらの入蕃の國は開元二五年の雜令規定にも見えているが、それも全く同様の國を掲げている。

(27) 『文書』では、①の一二行目に「行恩澤於此間、請一箇「」」を掲げているが、これは別の文書斷片であり、ここに接續するかどうかは疑わしいので省略した。

(28) 「唐麟德二年（六六五）牛定相辭爲請勘不還地子事」(69 TAMI 34:9) 『文書』五、九二頁) によれば、「對當」は「本人と對して直接取り調べる」という意味に解することができる。

(29) 黃惠賢『《唐西州高昌縣上安西都護府牒稿爲錄上訊問曹錄

- 山訴李紹謹兩造辯辭事》釋』『敦煌吐魯番文書初探』武漢大學出版社、一九八三年、三四四～三六三頁。
- (30) 黃、前掲註(29)論文、三五三～三五五頁。
- (31) 西州に安西都護府が置かれていた時期には、『文書』七、一九～二二頁などに見えるように、都護府は州ではなく縣に直接、符を下達していた。このことからすれば、西州で縣から直接、都護府に牒上することは豫想可能である。しかし安西都護府がクチャに置かれていたとすれば、西州はその管轄から外されるので、高昌縣が安西府に直接牒上することは考え難い。
- (32) 森安、前掲註(21)論文、一〇～一一頁。
- (33) 『唐咸亨四年(六七三)海生墓誌』が出土している。『文書』六、四五八頁。
- (34) より正確な地理比定の作業は残されているが、弓月城がイリ盆地のクルジャ附近に存在したことは疑いない。松田壽男「弓月についての考」『古代天山の歴史地理學的研究 増補版』一九七〇年、三三八頁。
- (35) 66TAM61:16(b)『文書』六、四七七～四七八頁。黃、前掲註(29)論文、三五五～三五九頁参照。
- (36) 黃、前掲註(29)論文、三五三頁。
- (37) 炎延・祿山はともに胡風の名であるが、吉田豊氏によれば、炎延はソグド語の $\gamma(\gamma)my'n$ (ヤフ神の恩恵)の音寫とされる。N. Sims-Williams, *ibid.*, p. 81. 参照。
- (38) 66TAM61:22(b)『文書』六、四七四頁。
- (39) 森安、前掲註(21)論文、四頁。
- (40) 復元關市令四。仁井田陞『唐令拾遺』東方文化學院、一九三三年、東京大學出版會復刊、一九六四年、七一五頁。仁井田陞(著)・池田溫(編集代表)『唐令拾遺補』東京大學出版會、一九九七年、一三九五頁。
- (41) 西北邊境域においては、厳しい國境管理が行われており、これらの法規が全くの具文であったとは考えられないことも指摘されている。菊池英夫「隋唐王朝支配期の河西と敦煌」『講座敦煌二 敦煌の歴史』大東出版社、一九八〇年、一三三～一三四頁。池田溫「敦煌の流通經濟」『講座敦煌三 敦煌の社會』大東出版社、一九八〇年、三二頁。
- (42) 桑山正進(編)『慧超往五天竺國傳研究』京都大學人文科學研究所、一九九二年、三八頁。
- (43) al-Tabari, *Tarikh al-rusul wa'l-muluk*. David Stephan Powers (translated and annotated), *The History of al-Tabari*, vol. XXIV, New York, 1989, p. 176. の英譯に據った。吉田豊「ソグド語資料から見たソグド人の活動」『岩波講座 世界歴史一』岩波書店、一九九七年、一八八頁。
- (44) M. H. Боголюбова и О. И. Смирновой, *Созидание Документов с Горы Муг. Выпуск III, Хозяйственные Документы*, Москва, 1963, стр. 55-56.
- (45) 吉田豊「ソグド文字で表記された漢字音」『東方學報』京都第六六冊、一九九四年、三〇四頁註(12)。
- (46) 藤田豊八『東西交渉史の研究 西域篇及附篇』岡書院、一九三三年、三〇〇頁。羽田明「ソグド人の東方活動」『岩波講座 世界歴史 6 內陸アジア世界の形成』岩波書店、一九

七一年、四二七頁。

- (47) 拙稿「北朝隋・唐代における「薩寶」の性格をめぐって」『東洋史苑』五〇・五一、一九九七年。

- (48) 山根清志「唐の「百姓」身分について」『社會經濟史學』四七一六、一九八二年。同「唐の「百姓」身分・補論」『中國古代の法と社會』汲古書院、一九八八年、二九三～三二二頁。

- (49) 森安、前掲註(21)論文、五二頁に検討するダンダン・ウィリク出土文書。この他にも多くのコータン出土文書に、羈縻州府下の一般良人を「百姓」とする例が認められる。

- (50) 『文書』九、一三〇頁。

- (51) もちろんこれが、内地州縣「百姓」とは明確に區別されていたことは言うまでもない。従って、唐律令制下の「百姓」には、律令が本來規定する内地州縣のそれだけを對象とする場合と、唐の支配下に組み入れられた、蕃域の羈縻州府のそれをも含んで指す場合とがある。

- (52) 池田、前掲註(41)論文、三四〇頁註(96)。「行客」の性格は多様であるが、商人の場合は寄寓地で附籍されたものは多いと考えられる。ただし西北邊への漢人商人の進出を考えれば、この邊りの「行客」が寄寓地で附籍される法的認知を得るのは、必ずしも八世紀玄宗期の客戶の制度化以降のことではあったとは限らない。また姜伯勳「敦煌新疆文書所記的唐代「行客」」國家文物局古文獻研究室編『出土文獻研究續集』文物出版社、一九八九年、二七七～二九〇頁参照。

- (53) 姜、前掲註(52)論文、二七九頁。前掲註(42)『慧超往五天竺國傳』一二二頁の森安「興胡」の註参照。

竺國傳』一二二頁の森安「興胡」の註参照。

- (54) 大津透「唐律令國家の豫算について」『史學雜誌』九五・一二、一九八六年、三〇頁。石見、前掲註(6)論文、七五頁。

- (55) 中村裕一「唐代官文書研究」中文出版社、一九九一年、四二五頁。

- (56) 復元賦役令六。仁井田、註(40)前掲書、六七二～六七二頁。

- (57) 仁井田、註(40)前掲書、六七二頁、仁井田・池田、註(40)前掲書、七六七～七六八・一三五四頁。また岡田宏二「唐代の羈縻政策―特に羈縻府州體制を中心として」『國立政治大學邊政研究所年報』一七、一九八六年参照。

- (58) 石見、前掲註(6)論文、四二三～四二八頁。これに對して堀敏一氏は、本條文が歸化した個人にかかるものであり、羈縻州民を對象としたものではないとされるが、本論の検討を踏まえれば、本條は條文全體を通して、西北邊の羈縻府州民を對象とするものと理解できるのではなからうか。同「中華世界」『魏晉南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院、一九九七年、五〇頁。なお「凡そ内附せし後に生まるる所の子は、即ち百姓と同じにして、蕃戸と爲るを得ざるなり。」の一文は、賦役令の本條文に附すべきものではない。

- (59) 大津、前掲註(54)論文、二九頁。「度支奏抄」は前掲賦役令の施行細則であると指摘する。

- (60) 興胡の中には、州の周邊地域のみで商業活動していた例も認められる。『文書』九、六八頁等。

(61)

このことは、南方ではあるが、圓珍が長安へ上る際に、越州都督府に至ってはじめて長安への過所を發給してもらっていることからうかがえる。礪波、前掲註(20)論文、六九四～六九七頁参照。

(62)

拙稿「中央アジア地域における唐の交通運用について」

(63)

『東洋史研究』五二―二、一九九三年参照。
隋の裴矩以外にも、北魏の北涼征服時の討伐理由(『魏書』卷九九、廬水胡沮渠蒙遜傳)、北周の西域招致策(『隋唐』卷七、禮儀志)などに認められる。

This document was called a *fu* 符. A bureaucrat from this department signed this agreement, however, the column reserved for dating was at that time left blank. A copy of this document was made and it was then returned to the *menxia* branch. Upon receipt of the king's orders, the Relations department would draw up another document known as a *fu*, the purpose of which was to appoint an official to enforce the decree. An official of the *menxia* branch inspected this document, and after that entered a date. The *shangshu* branch then issued this document to the responsible official as a *fu*. This system of the communication of the orders of a king via a document known as a *fu* is described and analyzed in this paper.

SOGDIA NS IN THE TANG EMPIRE

ARAKAWA Masaharu

The imperial rule of the Tang extended to the neighboring foreign countries, and continuing up until the period of the high Tang, the government exercised a loose control over these countries by setting up *ji-mi zhou-fu* 羁縻州府 ("loose reign" prefectures). The residents of these foreign countries were also entered as households of commoners in the household registers, as was prescribed by the *lŭ-ling* 律令 system. Among these foreign countries, almost all Central Asian countries extending as far as Sogdiana were included in this system. As a result, the trading activities of Sogdians were arranged in accordance with system. Within the *lŭ-ling* system, Sogdians were treated as merchants who were permitted to be entered in the household register of their domicile of choice after they had left their legal domicile. The Tang government ensured the safe passage of Sogdians via issuing them passports and allowing them access to the Tang communication system that connected them with the imperial capital. The Sogdian trading state established by Tang imperial order in the first half of the Tang era was entirely distinct from indigenous Sogdian states established both before and after this period.